

6) トロロアオイとオクラ=黄蜀葵とオクラ

トロロアオイはアオイ科フヨウ属の一年草で東南アジアを原産とし、製紙用の糊原料として植えられ、花が美しいために鑑賞用としても栽培されている。高さは1~2mとなり、葉は5~9片に深裂する掌状で、長柄があり互生する。7月中旬ごろから秋にかけて、花径10~20cmに及ぶ黄色の5弁花を横向きに開く。花弁の基部は暗紫色をしており、朝開花し夕刻には萎む一日花である。果実は5~6cmほどの楕円形で、細かい毛が密生する。和名の由来は全草に粘液があるため、トロロ(薯蕷)の意味である。別称はネリ、タモ、オウショッキ、トロロ、コウゾなどがある。コウゾと呼ばれていたのは、紙を作るときの原料にされていたからであろう。学名は『*Hibiscus Manihot*』で、属名はゼニアオイ属の植物につけられた古代ギリシャ名およびラテン名で、種小辞はブラジルのという意味である。イギリスでは『*sunset hibiscus*』と呼ばれ、中国では『黄蜀葵』である。近縁種としては『紅蜀葵』があり、花形も木の恰好もよく似ている。こちらの方は、その名前でもわかるように紅色の美しい花を開き、モミジアオイ(03-01-10-11)ともいわれている。

トロロアオイの根には特に強い粘性があり、砕いて水につけたものはネリと呼ばれ、丸薬の粘滑料や、和紙を製造するときの糊として用いられていた。また皮を剥いだ根を乾燥させたものを漢方では『黄蜀葵』(オウショッキ)といい、鎮咳や胃腸炎、咽頭炎にも用いられる薬であった。

一方のオクラは同じアオイ科の一年草で、アフリカの北東部エチオピア辺りが原産地で、高さは1m前後となり、トロロアオイよりもやや小さめで、同じように葉は大型の掌状で3~5裂する。夏、葉腋に花径10~12cmほどの黄色の5弁花をつける。トロロアオイと同じように一日花で、花の中心部も紅紫色であるために両者の区別は付きにくい。果実は緑色の莢(サヤ)で五稜がある。和名の起こりはアフリカ黄金海岸のチューイ族の呼称である『*nkruman*』を語源としており、別称としてオクロー、アメリカネリ、オカレンコン(丘蓮根)、ガンボウなどがある。アメリカネリとよばれるのは、前種と同様に紙の材料を固めるときに用いられたためで、またガンボウはコンゴの方言である。学名は『*Abelmoschus esculentus*』で、種小辞は食用を意味する。イギリスでは『*okra*』とか『*Syrian mallow*』と呼ばれ、フランスでは『*gombo*』、中国では『黄蜀葵』である。

オクラはエジプトでは2000年以上も前から食用として栽培されてきた。若い莢にはガラクトンやアラバンなどの成分が含まれているために強い粘性がある。吸い物や天ぷらなどの具として生食されるが、完熟した種子は炒ってコーヒーの代りとしても用いられた。日本に渡来したのは幕末から明治初頭で、一般的になったのは昭和40年以降のことである。最近では夏野菜の一つとして各地で栽培されるようになり、消費も増えている。



トロアオイの花。気に入った写真が撮れずに何回も植物園に通いつめた。朝早いうちでないと、真夏の太陽で花がうなだれていることも多かったからである(さいたま市緑区)。



トロロアオイも一日花である。この花のように下の2つの花弁の間が、広がって咲くことが多いようである。気に入った写真を得るまでに、合計5回通いつめた(さいたま市緑区)。



トロアオイの花(さいたま緑区慶応大学)。この花はやや昼に近かったせいか、上部の花弁がうなだれていて、筆者の意に沿うものではなかった。翌日行って見たが花が咲いてなかった。



トロロアオイのすぐそばに似た花が咲いていた。ナンキンワタ(04-03-03)の花である。オクラにもトロロアオイにも良く似ている。この3種の中では花は一番小さくて愛らしい。



オクラの花、野菜の花の中では最も美しい花の一つである。トロロアオイに良く似ている。



トロアオイの若い果実。果実の上部には蕾がついている(さいたま市緑区)。



1週間ぐらいおいて再びトロロアオイを見に行くとこんなに実がついていた(さいたま市緑区)。



オクラの果実、今では盛夏の緑黄色野菜のひとつである(埼玉県桶川市)。

[目次に戻る](#)